

研究要旨

本研究では、2015 年～2022 年の 7 年間に手術を行った症例、および 2017 年～2024 年の 7 年間に保存的治療を行った症例について、JESREC 研究と同じく全国 18 施設共同で疫学調査を行い、症例数（率）、重症度割合の変化を調べる。

以上から診断基準と重症度分類の見直しの必要性を判断し、診療ガイドライン作成を目指す。

A. 研究目的

本研究では、2015 年～2022 年の 7 年間に手術を行った症例、および 2017 年～2024 年の 7 年間に保存的治療を行った症例について、JESREC 研究と同じく全国 18 施設共同で疫学調査を行い、症例数（率）、重症度割合の変化を調べる。

さらに保存的治療、手術治療において、重症度別、CT 所見別にどれだけのかつどのくらいの治療効果があったかを、visual analog scale(VAS)にて調べる。症状別には、嗅覚障害、粘稠な鼻汁、鼻閉、頭痛について改善率と再発率を求める。手術療法においては、どのような術式が最も効果があるか、各施設を比較し同定する。

以上から診断基準と重症度分類の見直しの必要性を判断し、診療ガイドライン作成を目指す。

B. 研究方法

同意を得られた患者からアンケートを行い、そのアンケート結果と電子カルテから得られた症例情報をホームページ上の EDC（電子症例報告書）に入力する。

EDC のホームページは、パスワードにより厳重にセキュリティが保たれており、入力の履歴が残るようになっている。パスワードは各施設に 1 つずつ配布し、厳重に管理する。

（倫理面への配慮）

研究者等は、研究倫理審査委員会で承認を得られた同意説明文書を研究対象者に渡し、文書及び口頭による十分な説明を行い、質問する機会、および同意するかどうかを判断するための十分な時間を与え、本研究の内容を理解した事を確認した上で、自由意思による同意を文書で取得した。

C. 研究結果

今年度は副鼻腔炎に対し、手術加療を行った 37 症例を対象とした。16 例が好酸球性副鼻腔炎であり、内訳は重症 4 例、中等症 10 例、軽症 2 例であった。術後 6 ヶ月の時点で再発は 4 例であった。

症状別では粘稠な鼻汁、鼻閉、頭痛については最初から症状がなかった例を除き全例が術後症状改善を認めた。嗅覚障害については 9 例が改善し、改善率は 56.3%であった。

D. 考察

難治性で手術抵抗性といわれる好酸球性副鼻腔炎であっても手術によりある程度の治療効果を認めた。過去の報告では好酸球性副鼻腔炎の術後の嗅覚障害の改善率は 50-70%であり、本研究でも 56.3%と類似していた。

E. 結論

未だ研究途上であり、引き続き症例を集めて研究を継続する必要がある。

F. 健康危険情報

本研究は既存試料・情報およびアンケートを用いた研究のため該当せず。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし